

問題 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

自己とは他者である。

この言葉から、どんなことをイメージするだろうか。

人から余計なお節介で鬱陶しいアドバイスをされたりすると、「自分のことは自分が一番よく知っているから、ほっといてくれ」と言いたくなる。人にはこちらの気持ちなんかわからない。自分のことは自分にしかわからない。そう思うことがある。

でも、そう思って自分と向き合い、自分自身をとらえようとする、これがけっこうくせ者だとわかる。どうもよくつかめない。人のことはよく見えるのに、自分のことがよく見えなかつたりするのだ。

近すぎてわからないのか、「なんであんなことを言ってしまったんだろう」「自分は、ほんとうはどうしたいんだろう」「なんでこんなにムシャクシャするんだろう」と、わからないことだらけ。そんなことになりがちだ。

そうしてみると、一番身近であるはずの自分が、じつはとても遠い存在なのかもしれない。そのような意味で、自己とは他者であるというのではないか。それも一理ある。

でも、ここではもうひとつの意味を考えてみたい。

だれでも自分についてのイメージをもっている。

「自分は何があっても前向きで、笑顔で頑張っていけるタイプの人間だ」という自己イメージをもっている人もいる。「自分は神経質で、慎重なのは良いかもしれないが、どうも細かなことにとらわれすぎる」という自己イメージをもつ人もいる。「自分は人の気持ちがよくわかるやさしい性格だ」という自己イメージをもつ人もいる。

では、そうした自己イメージは、どのようにしてつくられたのか。

生まれつきもっていたなどということはある得ない話だ。赤ちゃんが、「自分は粘り強い性格だ」とか「自分はやさしい子だ」といった自己イメージをもっているなど、とても想像することはできない。自己イメージは、小さい頃からの経験の積み重ねによって、徐々につくられてきたものはずだ。

では、どんな経験が大きいのか。このように突き詰めていくと、自己は他者であるということのもうひとつの意味が見えてくる。

周囲の大人から「いつも笑顔で明るい子ね」と言われたり、学校の先生から「君は頑張りやだな」と言われたり、友だちから「お前は何があってもへこたれないな。その前向きな思考が羨ましいよ」と言われたりする経験が積み重ねられることで、「自分は何があっても前向きで、笑顔で頑張っていけるタイプの人間だ」といった自己イメージがつくられる。

親から「あんたはホントに神経質なんだから」と言われたり、先生から「慎重な性格なんだね」と言われたり、友だちから「細かいことにとらわれすぎじゃないのか」と言われたりする経験が積み重ねられることで、「自分は神経質で、慎重なのは良いかもしれないが、どうも細かなことにとらわれすぎる」という自己イメージがつくられる。

親から「〇〇ちゃんのお母さんがやさしい子だって言ってたよ」と言われたり、先生から「人の気持ちがよくわかるんだね」と言われたり、友だちから「いつもやさしくしてくれてありがとう」と言われたりする経験が積み重ねられることで、「自分は人の気持ちがよくわかるやさしい性格だ」という自己イメージがつくられる。

(好井裕明『「今、ここから」考える社会学』筑摩書房、2017による。)

問一 筆者が述べる「自己とは他者である」の「もうひとつの意味」とはどのような意味なのか説明しなさい。

問二 あなたは自分自身をどのような人間であると考えているか、問一で答えた筆者の考え方と関連付けながら 550 字以上 600 字以内で述べなさい。なお、筆者の考え方に「賛成」、「反対」、「どちらでもない」のいずれなのかを明示すること。

